



Data

監督・脚本: フランソワ・オゾン
 原作: ジョイス・キャロル・オーツ
 『Lives of the Twins』
 出演: マリーヌ・ヴァクト/ジェレミー・レニエ/ジャクリン・ピセット/ミリアム・ボワイエ/ドミニク・レイモン/ファニー・セイジ

👁️👁️ みどころ

『2重螺旋の恋人』とは何とも意味ありげなタイトルだが、フランスの“鬼才”フランソワ・オゾン監督は“双子”と“人間の二面性”をテーマとして、そこに想像以上のサスペンス色を！

『17歳』（13年）で衝撃的なエスコート・ガール役を演じたマリーヌ・ヴァクトが、本作では優しい兄と荒々しい弟という双子の精神分析医と怪しげなセックスシーンを見せるが、その妊娠が明らかになると、2重螺旋のDNA上の意味合いや、寄生性双生児等の難問が次々と提示され、サスペンス色が強まることに。

その結末にはかなりぞっとさせられるが、最後まで恐がらずに、クセの強いオゾン色をタップリと楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■フランソワ・オゾン監督あれこれ！本作のテーマは？■□■

私がフランスのフランソワ・オゾン監督の面白さに開眼したのは、「書くこと」に才能を見せる多感な少年（高校生）を主人公にした『危険なプロット』（12年）を観た時。文章を綴ることが大好きで、元作家の高校教師がその才能に惚れ込んだ少年クロードの、空想が空想を生み、妄想が妄想を生む中で、ごく普通だった「あちらの家庭」「こちらの家庭」にスリルとサスペンスに富んだストーリーが展開していくサマはまさにミステリーだった（『シネマ 32』180頁）。

そのフランソワ・オゾン監督が、本作でもヒロインのクロエを演じたマリーヌ・ヴァクトを主人公として起用した『17歳』（13年）も、「お金のため」でもなく、また「セック

スガしたくてしたくてたまらなかつたため」でもなく、いわば「自分探しのため」にエスコート・ガールになる少女を主人公にした衝撃作だった（『シネマ 32』103頁）。これは同じ時期に観た、第6回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した『アデル、ブルーは熱い色』（13年）（『シネマ 32』96頁）には及ばないものの、婚外子差別撤廃40年を迎え、離婚や事実婚が続出する中、「複合家族」が増えているフランスに見る、17歳の女性の生きざまとしてのすごいインパクトを与えてくれた。

そんなオゾン監督の最新作は『婚約者の友人』（16年）。これは1932年に公開された『私の殺した男』を大胆にアレンジしたもので、オゾン監督特有のミステリー的展開が興味深かった（『シネマ 41』289頁）。しかして、本作は？

本作でオゾン監督が設定したテーマは双子。つまり、人間の二面性だ。双子の兄弟が大活躍する“活劇モノ”にはアラン・ドロンが一人二役を演じた『アラン・ドロンのゾロ』（75年）や、レオナルド・ディカプリオが一人二役を演じた『仮面の男』（98年）等がある。他方、「ドッペルゲンガー（自己像幻視）」をテーマとした気持ちの悪い映画が、永作博美が映画初出演し、役所広司が一人二役を演じた『ドッペルゲンガー』（03年）（『シネマ 3』347頁）だったが、さて本作は？

■□精神分析医の診察室は？その診察風景は？■□

本作冒頭、婦人科医（ドミニク・レイモン）の診察を受けるクロエの姿が登場するが、彼女が訴える原因不明の“腹痛”は精神的なものと診断され、クロエは精神分析医、ポール（ジェレミー・レニエ）の治療を受けることに。精神分析医は個人経営が多いようだが、スクリーン上で見るポールの診療所には、受付もなく、看護師もおらず、ポール1人が対面するソファに座って患者の話を聞くスタイルだから、まずはその診察風景にビックリ。そして、その風景は本作中盤、ポールの双子の弟でポールと同じく精神分析医をしているルイ（ジェレミー・レニエ）の診察室も同じスタイルだから、さらにビックリ。

ドクターに患者の秘密を守る義務があるのは当然だが、精神分析医である彼らは患者の話を聞くについてメモもとっていないし、カルテも一切登場しないから、これでは診療所の体を成していないこと明らかだ。精神分析医なら看護師は不要かもしれないが、少なくとも患者の診察時間の調整やその受付、そしてカルテの整理などを行うスタッフは不可欠。しかし、本作ではそれらを一切省略している。その結果、男の精神分析医と女の患者が1対1で向かい合う診察風景が続く中、クロエの合意の上（？）とはいえ、ポールもルイも医師としての一線を越える“男女の行為”に及ぶが、こりゃ誰がどう見ても如何なもの・・・？

■□男の魅力は力強さ？それともやさしさ？■□

三船敏郎やジョン・ウェインの魅力は男らしい力強さだが、やさしさを男の魅力とする俳優の代表は、日本なら市川雷蔵、海外ならアラン・ドロン・・・？しかして、女性のあ

あなたは、男の魅力として力強さが好き？それともやさしさが好き？

フランス人女性は欲望に忠実（？）だから、優しいポールに惹かれて同棲生活に入っていたはずのクロエが、その後ルイの診察を受けると、強引で力強いルイにも惹かれていったのは当然？それとも・・・？また、クロエはポールの診察を受けると共に幸せな同棲生活を送ることによって、持病の腹痛が治りかけていたのに、なぜポールに内緒でルイの診察を受けることになったの？それはポールが双子の弟ルイの存在についてまともに説明してくれなかったためだが、いくら同棲中とはいえポールの私物のダンボールを勝手に開けるのは、互いのプライバシーの尊重の点から禁止では・・・？

互いに反発し合う双子をテーマとした本作では、“寄生性双生児”について小難しい“講学上”の解説がされるが、私はそれについてはチンプンカンプン。しかし、ポールとルイが互いに相手を憎悪し、無視し合っているのはよくわかる。面白いのは、そんな2人だから、クロエに対するセックスのあり方もやさしさと荒々しきの好対照になっていることだが、どうもクロエはその両者とも好きらしい。したがって本作には、そんなクロエが好対照の2人から同時に愛されるセックスシーンも登場するので、ポルノ映画の好きな人は本作のそんな“3Pシーン”を生ツバを飲み込みながらじっくりと・・・。

■□■私立探偵まがいの行動の是非は？■□■

フランス人女性の自立性が高いのは尊敬すべきだが、本作中盤に展開されるクロエの私立探偵まがいの行動は如何なもの・・・？とりわけ、ポールと、ルイの2人ともよく知っているという、高校時代の元同級生の女性を訪ねていくと、そこには昔ポールと付き合っていて交通事故に遭ったという女性、サンドラ（ファニー・セイジ）が寝たきり状態になっていたが、その顔は見ようによってはクロエそっくり・・・？こりゃ一体ナニ？

他方、ポールの診察を受け始めた当時は無職だったクロエも、今は美術館員として働いていたが、実質“監視員”として彼女が毎日見つけている展示物は、現れるたびに徐々にグロテスクなものに変わっていくから、それにも注目。また、クロエがネコと共に引越していったポールの部屋の隣には、お節介なローズおばさん（ミリアム・ボワイエ）が住んでいたが、このおばさんも曰くあり気なことは明らか。とりわけ、親切心でクロエの愛猫を預かってくれたのに、ある日逃げられてしまったと言うのはホント・・・？

他方、クロエとルイの荒々しいセックスは日増しに強まり、ポルノ色を強めていくが、それが診察風景にも広がり、ある日は2人とも素っ裸でソファに座る診察風景も登場することに。ここまでくると、珍しさを通り越して、いやはや・・・？『ドッペルゲンガー』も、ユーモアの中にも恐ろしい映画だったが、本作もクロエの美しいヌードシーンや、R18+指定らしい過激なセックスシーンが登場するものの、美しさ感よりも恐ろしいサスペンス色が強まっていくことになる。

そして、の中で徐々に明らかになっていく“秘密”には驚くばかりだが、クロエがそ

んな私立探偵まがいの行動をくり返す中、クロエ自身にもある変化が・・・。

■□お腹の中の子供の父親は？2重螺旋の意味合いは？■□

男と女が同棲し、毎日のように性交渉を続ければ妊娠するのが当然。その場合、女性はお腹の中の子供の父親がわかるのが当然だが、ポールとルイ、2人との性交渉を同時並行してきたクロエが、それを明確にすることができなかったのは仕方ない。もともと、そんなことは枝葉末節で、どうでもいいこと・・・？クロエの他、ポールとルイもそう割り切れれば何も問題はないが、クロエの誕生日のプレゼントのあり方を巡って、どちらがポールでどちらがルイかがわからなくなる混迷状態に加えて、ポールとルイが双方とも強引に「俺の子供だ」と言い始めると、事態は次第に収拾がつかないことに・・・。

昔観た『ローズマリーの赤ちゃん』(69年)は、大きくなっていく妊婦のお腹の中の子供の父親が悪魔ではないかという恐ろしい展開になっていったが、本作でもスクリーン上でクロエのお腹が急に膨らんでいくシーンを観ていると、『ローズマリーの赤ちゃん』のそんなシーンを思い出して思わずゾー。女性には“想像妊娠”と言う現象もあるそうだが、私には前述した“寄生性双生児”がサッパリなら、DNAによる2重螺旋の鎖の相関関係という問題提起もサッパリ。章子怡(チャン・ツイイー)が熱演した中国映画、『ジャスミンの花開く』(04年)、『シネマ17』192頁)では、ヒロインは雨が降る中の路上で1人だけで立派に赤ちゃんを産んでいたが、さて本作ではクロエの赤ちゃんは？

セックスの真っ最中を暗闇の中でじっと見つめる猫の目は、私にはあまり気持ちのいいものではない。もともと、ポールは私と同じような感覚で、クロエの愛猫を寝室から追い出すように言っていたが、クロエはそうではないらしい。しかして、本作ラストにはかなりズッとさせられる衝撃的なシーンが登場するので、それにも注目！もともと、ここまでやると鬼才・オゾン監督のワル乗り(?)が少し過ぎるように思えたため、私は本来星5つとしていた本作を星4つに減点することに・・・。

2018(平成30)年8月15日記